

事例

佐藤寛子

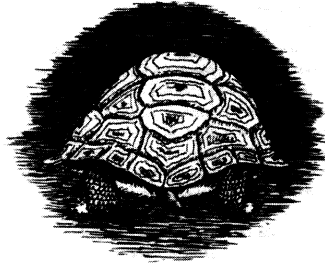


Illustration by Michael Ende
out of: Michael Ende, Momo
©1973 by Thienemann Publishing
House
(Thienemann Verlag GmbH),
Stuttgart - Wien.

●二匹のカメの存在

四歳児の一学期。新入児、進級児が入り交じり、緊張して過ごしている子どもたちが多かったこの時期、保育室で飼っていた二匹のカメは子どもた

ちの人気者でした。水槽を数人で囲み、カメの様子をみんなで見つめてみると、勇気のある子どもが手を突っ込んで触ってみます。その様子をみんなで見守り、カメの頭や手足が引っ込むたびに、「うわあっ！」と驚きの声が上がります。その後、顔を見合わせて笑い合う声が響きます。子どもたちにとって、カメと触れ合うひとときは、傍らで共に過ごすような心もちの友達と出会う大事な時間になっていました。

時折、園庭に水を張ったタライを出し、その中にカメを放すと、カメはのびのび気持ち良さそうに動き始めました。子どもたちは、カメの動きに誘われるように、一人また一人と園庭に出ていきました。タライを囲み、カメの様子を寄せ合ってみつめる子どもたち。カメとの触れ合いをきっかけに、友だちとのかわりが生まれ、安心して行動できる空間が広がったりしていきま

●カメがいなくなる

五月のある日、園庭に出したタライを囲んで、子どもたちが楽しそうにカメを眺めていたので、ここは大丈夫だろうと、私はその場を離れました。ところが、少しして戻ってみると、タライの周りには子どもたちは一人もおらず、タライをのぞくと、二匹いたはずのカメが一匹しか見あたりません。近くの砂場で遊んでいたY夫に尋ねてみましたが、すでに穴掘りに夢中な彼にカメの行方などわかるはずなどありません。

「これは大変！」

必死で探し始めた私の様子に何事かと気づいた子どもたちが集まり、一緒に探し始めてくれました。無事に出てきてほしいと必死でカメを探しましたが、願いは届かず、結局その日は見つげ出すことができませんでした。翌日は遠足。翌々日も休園で、子どもたちが次に登園してくるのは三日

後でした。その間にいなくなったカメのことを忘れてしまったは大変だと思い、

「みんなが幼稚園をお休みしている間も、頑張つてカメを探してみるからね」と、私は子どもたちに話しました。

●カメのチュウ

休み明け、Y夫は登園するとすぐに、セロハンテープ、画用紙、はさみ、フェルトペン、ちりとり、紙テープ等を用意し、「カメの仕掛けを作る」と張り切つて準備を始めました。Y夫が「仕掛け」なるものを作り始めたのは園庭の高台。私たちが「おやま」と呼んでいる場所でした。保育室から園庭に面した出入り口を出て真っすぐ歩いた所に、坂道になったトンネルがあります。そこが「おやま」へとつながる道の一つになっています。子どもたちと一緒にその道を行き来しながら、私は二匹のカメにまだ名前を付けていなかったことを

思い出しました。

「名前ぐらい付けてあげればよかったな……」と私がつぶやくと、

「もうとつくに付いてたよ。チュウとキユウ。いなくなつたほうがチュウ！」とY夫が言いました。「おやま」に登る通路は他にもありましたが、Y夫たちは、それぞれの通路が交わつた一番高い所に、カメの仕掛けを作り始めました。通路の真ん中であることに、私は少々戸惑いましたが、カメのチュウ失踪の情報が園にあつという間に伝わつていったのは、人の行き交う見通しの良いこの場所を、子どもたちが選んだからに他なりません。

「チュウが帰ってくるように、餌を置こう！」と子どもたちは、ちりとりで砂団子や枯れ葉をのせました。K夫は水が必要だとジョウロに水をくみ、地面に穴を掘って流し入れました。地図を書いて失踪のルートをとどめる人、チュウの似顔絵を描き、仕掛け場所近くの木に貼り付ける人など、子ども

たちは思い思いにチュウ探しを始めました。

●「チュウ探し」がみんなの関心事になる

チュウ探しに夢中なメンバーは、毎日「おやま」に集うようになり、それがきっかけとなり、多く子どもたちが「おやま」の上に行くようになりました。

木々に囲まれ、見通しの利かない「おやま」は、園舎や下の園庭とは違う、生活の流れとは切り離された特別な雰囲気のある場所です。慣れない子どもたちにとっては、一人では到底出かけられない場所でしたが、「チュウを探す」という共通の目的があることで、少しずつ子どもたちの身近な場所になっていきました。また、「おやま」の上でも、仕掛けを置いた場所は、立ち上がると下の園庭や保育室の様子が見えたので、ホッと安心できる場所になったようです。

そんな折、T夫の母親から、T夫がチュウ探し

のことを家で熱心に話している、ということを知りました。T夫は保育室で過ごすことが多かったので、意外に思い、T夫の様子をよく見ていたら、わかったことがあります。カメの仕掛けのある場所は、保育室の中からもよく見えたのです。

T夫は窓際にあるママゴトコーナーで気の合う女兒たちと遊びながら、窓から見える他の友達の様子を見ているのかもしれない。ときどき保育室に戻ってくるカメラ探しのメンバーたちの話から今日の捜索状況を推測し、おそらく家で話していたのでしょう。

参加の仕方は一人ひとりそれぞれであることを感じ、興味深く思っていました。このT夫がその後のチュウとの再会の鍵を握っていたとは、この時は思ってもいませんでした。

● 一本の電話

チュウがいなくなつてから、二週間ほどたった

ころ、「カメ、預かっていますよ」と隣接する附属小学校から、夕方、突然電話がありました。急いで見に行くと、六年四組の教室に置かれた水槽にいたのは紛れもなくチュウでした。「チュウだ！」と驚く私に、K先生が話してくれたのは次のようなことでした。

一週間ほど前に、小学校の体育館横にカメラがいることを六年生が発見。土とほこりにまみれた瀕死の状態を救い出し、きれいに洗って水槽に放した。どこかのクラスで飼っていたカメラが、逃げ出したのではないかと、早速、小学校の全クラスに呼びかけた。ポスターも作って掲示。ところが、どこからも返事がない。そこで、六年四組の教室で預かり、飼うことになった。(チュウは六年四組では、「かめきち」と名付けられ、かわいがってもらっていました。)

今朝、二年生クラスの朝のスピーチ(子ども

たちが身近な出来事を話す時間)で、「弟の幼稚園でカメがいなくなりました」という話が出たことがきっかけとなり、二年生担任T先生が、「もじゃ?」と六年四組担任のK先生に相談。「幼稚園から逃げ出したに違いない」と確信。(そこで電話をかけてくださったということでした。)

そして、すべてが結びつくきっかけとなったスピーチをしたのが、あのT夫の姉だったのです。

●チュウとの再会

私自身、あきらめかけていた時の思いがけない知らせに心躍らせ、翌朝早速子どもたちに伝え、みんなで迎えるに行くことにしました。チュウ探しにまつわるこの一連の出来事の結末は、みんなで体験することにこそ意味があるだろうと考えたからです。

いよいよチュウを迎えに行く日。初めて訪れる

小学校に、少し緊張気味の子どもたちを、六年生が数人、「こつちだよ」と、途中まで迎えに来てくれました。さらに、六年生は教室までの案内の道すがら、「ここで見つかったんだよ」とチュウを発見した体育館横にも案内してくれました。指さされたその場所を子どもたちは、じつと息をのむようにのぞき込んでいました。

チュウのいる六年四組の教室は、校舎の横の外階段を上ってすぐでした。正面玄関を通らずに、スムーズに教室にたどり着くことができ、六年生と担任の先生の配慮が伝わり、温かい気持ちになりました。

教室では、担任の先生、たくさんのお兄さんお姉さんに迎えられ、歓迎された子どもたち。少し圧倒された様子でしたが、とてもうれしそうでした。いよいよチュウとの再会。運びやすいように水槽からバケツの中に移されたチュウをのぞき込み、

「チュウだ！」「ほんと、チュウだね！」と口ぐちに言う子どもたちに、六年生は、見つけた経緯やこれまではどうやって飼っていたかなど、丁寧に話してきかせてくれました。見つけた時には元気がなかったこと、その時にはすでにチュウの額に傷があったことなどを聴き、園のタライを抜けた日から六年生に見つけてもらうまでの間、チュウが遭遇した数々の困難を思いました。子どもたちも真剣な表情で話を聴き、チュウの様子をじっと見ていました。

●チュウの足取りをたどってみて

帰り道は、六年生が園まで送ってくれました。校庭を通って帰ったところ、スピーチでチュウの話をしてくれたT夫の姉にも出会うことができました。

幼稚園の門に着くと、K夫は、

「チュウは、ひらべつたいから、（小学校と幼

稚園の境の門を）くぐっていつちゃったんだね」とつぶやきました。

自分の身体の感覚をたよりにチュウの居場所を考えていた子どもたちが、実際にチュウが通ったであろう道を歩いてみたことで、初めてカメの感覚でその足取りに思いをはせることができたのではないかと考えます。そして、チュウの行き着いた先が、自分たちの少し先を歩く小学生たちの暮らす場所であったことや、小学生が、自分たちと同じように、迷い込んできたカメに気持ちをかけ、大事に飼ってくれていたことがわかったことは、子どもたちにとって、今を生きていく上での大きな安心につながったような気がします。

チュウとの再会の喜びに、小学生との素敵な出会いという大きなプレゼントがついて、子どもたちの暮らしがまた一つ豊かになりました。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）